慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジャンカルロ・カザーレ著『オスマン帝国の「大航海時代」』
Sub Title	Giancarlo Casale, The Ottoman age of exploration
Author	相磯, 尚子(Aiiso, Naoko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.3 (2018. 2) ,p.185(409)- 193(417)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20180200-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

ジャンカルロ・カザーレ著『オスマン帝国の「大航海時代」』

相磯尚子

一

本書は一六世紀オスマン帝国のインド洋政策について論じた研究書である。従来の研究では、インド洋政策決定をめぐってエジプト州総督の重要性が過大評価される傾向にあったが、本書ではイスタンブルの中央政府とインド洋のムスリム勢力との関係にも力点が置かれている。本書の目的は、ポルトガルとオスマン帝国のインド洋政策に共通してみられた事柄に注意を払いつつ、一六世紀オスマン帝国のインド洋政策を六つの時代に区分し再検討することである。

現在ミネソタ大学教養学部にて教鞭をとる著者のジャンカルロ・カザーレは、一六世紀におけるオスマン帝国のインド洋政策について、「大航海時代」を迎えたポルトガルの動向を注視しながら研究を進めてきた。本書は二〇〇四年に提出された博士号請求論文や既刊論文に加筆・修正したものである。本研究では主に以下の史料が用いられている。オスマン語史料では枢機勅令簿（Mühimme Defterleri）、セイディ・アリ・レイス（一五六三年没）による『諸国鏡（Mir'âtü'l-Memâlik）』、ポルトガル語史料では、一六世紀の探検家ディオゴ・デ・コートによる『アジア史（*Da Ásia de João de Barros e de Diogo do Couto*）』を始めとする見聞録や、トーレ・ド・トンボ国立文書館（Arquivo Nacional da Torre do Tombo）に収蔵されている書簡などである。

本書は出版から七年が経過しているが、本書を嚆矢と

して歴史地理学分野での再考が始まっており、[1]現在も海洋政策史の基本文献として欠かせない存在である。こうした本書の重要性を踏まえ、本稿では章ごとにその内容を紹介し、若干の批評を試みたい。本書の構成は以下の通りである。

序論　心の帝国
第一章　航海者セリム
（一五一二～一五二〇年）
第二章　イブラヒム・パシャと調査の時代
（一五二〇～一五三六年）
第三章　ハードゥム・スレイマン・パシャの世界大戦
（一五三六～一五四六年）
第四章　リュステム・パシャ対インド洋勢力
（一五四六～一五六一年）
第五章　ソコッル・メフメト・パシャと帝国の絶頂期
（一五六一～一五七九年）
第六章　人、計画、運河：ミール・アリ・ベイのスワヒリ沿岸部遠征
（一五七九～一五八九年）
第七章　政策の死

二

序論では本書のねらいとして、比較史よりも通時史に重きを置き、「近世オスマン史にグローバルな政策という新たな枠組みを導入」（九頁）することが述べられる。そこで著者はヨーロッパにおける「大航海時代」をインド洋への進出の時代であると捉え、オスマン帝国も同様に「大航海時代」を迎えていたのだとする。「大航海時代」の定義の難しさに言及しつつ、少なくとも一六世紀のポルトガルとオスマン帝国のインド洋政策には、インド洋の地理情報の欠如、香辛料交易への経済的関心と政治的イデオロギーの結びつき、優れた軍事技術の保持、地理学の発展という共通する四つの特徴が看取できるという。そして、「大航海時代」のインド洋には、直接的に支配した地域以外にも宗教的権威に基づいた「心の帝国」とも呼ぶべきオスマン帝国の勢力圏が存在していたのだとする。このような勢力圏の成立を可能にした存在として、中央の官僚とインド洋の現地有力者との個人的な結びつきに着目する。以下の各章では、「大航海時代」の四つの共通点に注意を払いつつ、オスマン帝国のインド洋政策について時系列に沿って検討を行う。

第一章では、エンリケ航海王子（一四六〇年没）とセリム一世（在位一五一二～二〇年）が採ったインド洋政策に共通する背景として、香辛料交易という経済的関心と、インド洋に関する地理情報の欠如を指摘する。ポルトガルを始めとする西欧では中世以降あまり地理学分野での進展は見られなかった。オスマン帝国でもアラブ地理書は存在したが、実際にほとんど利用されず、むしろポルトラーノ海図をはじめとするヨーロッパ由来の地理情報の獲得に熱心であり、ポルトガルと地理情報の面では同水準であったとする。

ここで著者は「ルーミー」と呼ばれたトルコ語を話すムスリムがインド洋政策に果たした役割に着目する。一四九九年に遡るポルトガルのインド洋進出に対処するため、マムルーク朝はオスマン帝国に救援を要請し、バヤズィト二世（在位一四八一～一五一二年）は人材や物資の支援を行った。その結果、オスマン帝国のエジプト征服以前からルーミーたちがインド洋で活動しており、ひとつの商業共同体を形成した[2]。オスマン帝国がエジプトや紅海支配を確立する際に彼らが重要な役割を果たしたのである。

こうしたルーミーや地元ムスリムたちにオスマン帝国が友好的に受け入れられた理由として、著者は政治的イデオロギーを指摘する。オスマン帝国はメッカ・メディナ両聖都の征服によってイスラーム世界の盟主を主張し、他方、インド洋地域のムスリムたちは、守護者たるオスマン帝国に対し、キリスト教国であるポルトガルの放逐を期待したのである。世界的規模の君主を標榜したことはポルトガルにも看取された。このようなイデオロギーは、香辛料交易という経済的関心と結びつき、インド洋政策の推進力となった。

以上の共通点こそオスマン帝国のインド洋政策が「大航海時代」を迎えていた証左であるという。著者はオスマン帝国がインド洋への関心を向けた契機であるマムルーク朝戦争が開始した一五一六年を「大航海時代」の開始年とし、一五二〇年にセリム一世が死去するまでの時期をオスマン帝国の「大航海時代」の黎明期と位置付ける。

第二章では、インド洋政策を牽引した人物として、エジプト州総督や大宰相の経歴をもつイブラヒム・パシャ（一五三六年没）に着目する。彼はエジプトへの道中に世界地図の製作者ピーリー・レイス（一五五四年没）から最新の世界情報を聞き出したほか、エジプト州総督就

任後にはインド洋の海洋冒険者セルマン・レイス（一五二八年没）にジッダへの航海と調査を命じ、ジッダに残された旧マムルーク艦隊と大砲の全容を含む報告書を提出させた。この一五二五年の報告書はスワヒリ沿岸部やエチオピア、イエメン、インドネシア島嶼部などの地理情報を含んだほか、メッカ・メディナの防衛上の脆弱性を指摘していた。こうした情報に基づいて、イブラヒム・パシャはインド洋において積極策を展開したのだという。また、イブラヒム・パシャが交易振興を図り、マムルーク朝時代に行われていた香辛料の強制売買を廃止したことにより、ポルトガルの脅威下においてもエジプト経由の香辛料交易は衰退を免れたとする。以上の点から、著者はイブラヒム・パシャが大宰相となった一五二〇年から処刑された一五三六年までを「大航海時代」における調査の時期であると位置付ける。

第三章では、イブラヒム・パシャに次いでエジプト州総督となったハードゥム・スレイマン・パシャ（一五四七年没）がインド洋政策において果たした役割に着目する。彼のインド洋政策の特徴は、ルーミーを含むインド洋各地のムスリムとの協力関係にあった。一五二八年にルーミー共同体の筆頭であった前述のセルマン・レイスが没したことでルーミーたちは各地に離散したが、グジャラート王国をはじめとする離散先でもハードゥム・スレイマンとの交流を続けた。特にホジャ・サファル（一五四六年没）はグジャラート王国におけるルーミー共同体のまとめ役としてスーラトやディヴを中心に重用されたため、オスマン帝国にとっては貴重な情報源となった。さらに、ハドラマウトの港シフルや、ゼイラ島、アチェ王国との協力関係を成立させた。その結果、一五三六年から十年にわたってアデン、マスカットなどアラビア半島沿岸部やセイロン島、マラッカ海峡など各地でオスマン艦隊と在地勢力の協力関係のもとにポルトガルとの戦闘が行われた。こうした協力関係の背景には、インド洋勢力が支援を求めるだけの海軍力をオスマン帝国が有していたこと、ポルトガル勢力の排除という共通目的のもとにイスラーム諸国家の盟主としての「保護」を期待していたことが挙げられる。このように、イブラヒム・パシャが没した一五三六年からハードゥム・スレイマン・パシャが失脚する一五四六年までを、著者はインド洋世界全体を舞台とした「世界大戦」の時期であると位置付ける。

第四章では大宰相リュステム・パシャ（一五六一年没）

と、著者が「インド洋勢力（Indian Ocean Faction）」と呼ぶ現地のムスリム勢力との関係を検討する。大宰相リュステム・パシャはエジプト州やインド洋地域における中央集権化を図り、人事を意のままに進めようとした。しかしインド洋勢力にとって中央で活動してきた「よそ者」は受け入れ難く、イエメン州総督をはじめとする要職の任官をめぐって中央と対立した。ここで著者は、オスマン帝国のインド洋政策の成否の分け目としてインド洋勢力との協力関係を指摘する。例えば、リュステム・パシャによって任命されたピーリー・レイス率いる一五五二年のホルムズ遠征は失敗に終わり、ピーリー・レイスに代わって指揮官となったセイディ・アリ・レイスも一五五三年のマスカット遠征において艦隊を全て失ったうえ、自身も遭難して陸路からイスタンブルへ帰還することとなった。これらの事例では、地中海で経験を積んだ船長が指揮官に任命されており、インド洋における経験不足に失敗の原因があった。むしろ戦果を挙げたのは、インド洋勢力であるセフェル・レイス（一五六五年没）による略奪行為であった。彼は他の地中海で経験を積んだ船長たちのように大艦隊を編成せず、小艦隊でインド洋の地理を利用した戦法をとったのである。中央とインド洋勢力の両指揮官が協力して率いた場合にも、一定の成果がみられた。例として著者は一五四七年のイエメン反乱を取り上げ、鎮圧のために中央からピーリー・レイスが派遣されつつも、エジプト州総督をはじめとするインド洋勢力独自の判断の優先も見られたことから、両者が連携することで一定の成果を収めたのだと指摘する。このように、オスマン帝国のインド洋政策の成果はインド洋勢力の協力に左右されたのである。その後インド洋勢力による独断での遠征や要職への任命が相次ぎ、リュステム・パシャによる中央集権化は後退した。以上のように、リュステム・パシャが大宰相となった一五四六年から一五六一年をリュステム・パシャとインド洋勢力、すなわち中央と現地のせめぎ合いの時期と位置付ける。

第五章では急速に拡大した外交関係に注目しつつ、大宰相ソコッル・メフメト・パシャ（一五七九年没）主導のインド洋政策について検討する。一五六五年にソコッル・メフメト・パシャが大宰相に就任するまでは、大宰相セミズ・アリ・パシャ（一五六五年没）の主導によってポルトガルとの通商協定締結が模索されていた。この和平路線は一時的にインド洋勢力の反発を引き起こした。和平が成立する前にソコッル・メフメト・パシャが大宰

相となり、再び反ポルトガル外交へと方針が転換された。ここで著者は、アチェ王国との互恵関係に着目し、その成立に重要な役割を果たした使者ルトフィーの活動についてオスマン語・ポルトガル語史料に依拠して実態解明を試みる。それによると彼は、使者としてアチェ王国への道中で、情報収集と同時に現地ムスリムがポルトガルに対し反乱を起こすよう各地で工作をした。その結果アチェ王国滞在中にカリカット、セイロン、グジャラート、モルディヴからの使者と面会し、アチェ王国の使者を伴って一五六六年にイスタンブルへ帰還した。そして、彼の報告をもとにアチェ王国へ対ポルトガルの支援艦隊派遣が決定されたという。

ソコッル・メフメト・パシャのインド洋政策には、インド洋の地理情報が重要な役割を果たしていた。黒海出身の海洋冒険者セイディ・アリ・レイスによる『諸国鏡』は、彼が一五五四年にインド洋で作戦中に遭難し、グジャラート王国を頼って内陸からアフガニスタン、ウズベキスタン、イランを旅し、イスタンブルに帰還するまでの見聞録である。一五六〇年に上梓された『諸国鏡』には、インド洋の地理情報に加えてオスマン帝国が現地のムスリムに歓迎されていることが叙述されていた。

ソコッル・メフメト・パシャはこれによってインド洋勢力との協力関係の可能性を見出したと考えられる。以上のように、本章では一五六一年から一五七九年のソコッル・メフメト・パシャの大宰相解任までをオスマン帝国インド洋政策における最盛期であると位置づける。

第六章ではオスマン帝国のインド洋政策の衰退について検討する。そこで前述のセフェル・レイスの後継者であるミール・アリ・ベイ（没年不明）による一五八九年のスワヒリ沿岸部への遠征失敗を取り上げ、原因として中央からの遠さとそれによる物資・人材不足を指摘する。エジプト州総督やイエメン州総督を歴任してきたコジャ・スィナン・パシャ（一五九六年没）は、中央の対応の迅速化と支援の円滑化を目指してスエズ運河の掘削を主張したが、実現しなかった。さらに、台頭するムガル帝国の存在もインド洋におけるオスマン帝国の影響力低下の一因となった。このように領域的にもオスマン帝国のインド洋政策は限界を迎えており、一五七九年から一五八九年をオスマン帝国の「大航海時代」の最後の局面と位置付ける。

最終章である第七章では、一五九〇年以降のインド洋政策にみられるパラドクスを指摘する。オスマン帝国の

インド洋政策はポルトガルの脅威を背景として構築されてきたが、一五六〇年代以降ソコッル・メフメト・パシャによってインド洋勢力との互恵関係のもとに徐々にインド洋の安全が保証された。これはインド洋勢力にとって、インド洋におけるオスマン帝国の保護の必要性が低下したことを意味したのである。さらに、エジプト州総督やイエメン州総督自体が個人的に商業に従事するようになったために、オスマン帝国による香辛料交易の管理体制が弱体化した。そして、国家に代わり、香辛料交易で財を成した商人によって、隊商宿や倉庫などのインフラ整備が担われるようになった。このように、オスマン帝国のインド洋政策は持続不可能となり、オスマン帝国の「大航海時代」が終焉を迎えたのだとする。

最後に、「大航海時代」がオスマン帝国の知識面に及ぼした影響について検討する。「大航海時代」初期である一六世紀初頭には、インド洋の情報収集、分析、普及が促進された。一五六〇年代になるとインド洋交易の隆盛により、オスマン帝国内で現地の経済・地理・歴史などへの関心が高まり、関連する著作が多く求められたという。どのような市場があったかについて明確な記録はないと断りつつも、その論拠として現存する当時の著作が質量共に多様化していたとする。例えば、一五二六年にスルタンに献上されたピーリー・レイスの『海洋の書（Kitâb-ı Bahriyye）』は、一五六〇年から一六世紀末にかけて多数の写本が製作された。また、セイディ・アリ・レイスによって一五六二年に書かれた『大洋の書（Kitâbü'l-Muhît）』はインド洋の航海指南書である。さらに、アラブ地理学書のオスマン語への翻訳が盛んに行われるようになった。とりわけ一五五〇年代から執筆されたシパーヒザーデ・メフメト（一五八九年没）の『諸国の知識への道の場所（Evzahü'l-Mesâlik fî Ma'rifeti'l-Buldân ve'l-Memâlik）』は、携帯を想定した縮小版が製作されており、実用的なレベルでの需要の高まりを示しているという。同様に、地図の製作もオスマン帝国内で活発化したほか、イタリアをはじめとするヨーロッパ諸国からの輸入も見られた。

オスマン帝国のインド洋政策が以上のような展開を見せた後、インド洋での主役はサファヴィー朝、ムガル帝国、オランダ、イギリスへと代わられていった。一七世紀中頃までにオスマン帝国の「大航海時代」は収束したのである。

三

最後に、評者の所感を述べたい。本書は先行研究の成果を通時的に整理し、ポルトガル側の史料やオスマン側の史料を用いて一六世紀におけるオスマン帝国とインド洋世界との複雑な関わりを詳細に描き出した点において非常に評価されるべきものである。本稿では十分に触れることができなかったが、インド洋勢力やルーミーについて、可能な限り具体的な実態が明らかにされている。従来のオスマン海軍史研究では、地中海とインド洋は別々に検討される傾向が強かった。しかし、本書は中央の官僚とインド洋の現地有力者との個人的な関係を、ポルトガル側・オスマン側どちらの史料も用いて明らかにした点で非常に有益な研究である。

ただし、いくつかの問題点が挙げられよう。まず、本書で扱う「大航海時代」についてヨーロッパ史研究における議論に具体的に触れておらず、明確に定義されていない点である。その定義が不明瞭なまま、オスマン帝国も同様に「大航海時代」を迎えていたとする結論にはやや性急な印象を受ける。本書はオスマン帝国が「大航海時代」の影響を受け、「大航海時代」を迎えていた国と直接関係したことを明らかにしたが、オスマン帝国そのものに「大航海時代」と言える時期があったかどうかを示すためには、その時期のインド洋政策が、他の時期の進出政策とは異なる特徴を有すことを指摘する必要があるように思われる。

また、著者の呼ぶ「インド洋勢力」が明確に定義されていない点も問題であろう。本書九〇頁において、マムルーク朝の軍人一家に生まれ、旧マムルークやその子孫たちがオスマン臣民として新しい州行政へ組み込まれた時期である一五二〇年代にオスマン帝国へ出仕したオズデミル・パシャの経歴は、「インド洋勢力」の典型であるとした。しかし、例えば一五六頁では、アルバニア出身であるコジャ・スィナン・パシャも「インド洋勢力」とみなす描写がされており、必ずしも出自がエジプトやインド洋である必要はないように見受けられる。またその立場も、コジャ・スィナン・パシャのようにエジプト州総督やイエメン州総督などオスマン帝国の官職を持つ者や、ホジャ・サファルのようにグジャラート王国での役職を持ちながらオスマン帝国との協力関係にある者や、海洋冒険者ミール・アリ・ベイなど様々である。おそらくインド洋世界を拠点としてオスマン帝国に協力する

人々を意味するのだろうが、さらに踏み込んで議論する必要があるだろう。上記のような「インド洋勢力」に内包される人々の内情の複雑さを明らかにしたことは、本書の成果のひとつと言えるだけに、残念である。また、インド洋のムスリムの中にはポルトガルとの協調を選択した人々もいたはずである。一六世紀のインド洋世界を明らかにするためには、彼らについても言及する必要があるだろう。

以上のような問題点はあるものの、本書は一六世紀オスマン帝国における海洋政策史の基本文献として読まれるべき好著であることは間違いない。

（Giancarlo Casale, *The Ottoman Age of Exploration*, New York : Oxford, 2010.）

註

（1） Pınar Emiralioğlu, *Geographical Knowledge and Imperial Culture in the Early Modern Ottoman Empire*, Farnham : Ashgate, 2014.

（2） 本書では触れられていないが、著者はオスマン船員の構成を分析した別稿において、現地の人々にとってルーミーはポルトガル人と同様に、地中海文化圏からの「よそ者」として捉えられていたことを指摘している。Giancarlo Casale, “The Ethnic Composition of Ottoman Ship Crews and the “Rumi Challenge” to Portuguese Identity”, *Medieval Encounters*, 13, 2007, pp. 122–144.